

# 着ぐるみアリオの魔王道

作者名..こおろぎアトリエ

原稿枚数..18ページ

「着ぐるみアリオの魔王道」・登場人物表

芦那梨桜 (16)

ヒーローショーのバイトをする女子高生。  
愛称は「アリオ」

パヌウ (331)

ゴブリン族のリーダー。  
人間に奴隷として扱われる日々を憂う

イリニヤ (200)

魔物達の導き手。  
ダークエルフ族であり現在は王子の側室

アーウィン (24)

王国の王子。  
目的のために家族をも追放した非人道行為が目立つ

お母さん、お父さん、お兄ちゃんへ。

大変誠に残念なご報告があります。

あなた達を愛して止まない芦那梨桜ですが……見覚えのない世界に辿り着いてしまいました。

「ひょえ〜……こ、ここはあ……」

数分前まで普通にバイトへ向かい、着替える最中だった。

たまたま外から声を掛けられて、脱衣所のドアを開けた途端、私はこの——鬱蒼とした草原の前に佇んでいた。

これがいわゆる異世界転生？

異世界転生ってもう流行は終わったんじゃないの？

今更、私がそんな事象に巻き込まれることになるなんて。

たしかに私、昔から異世界には憧れてたよ。

でも、私が欲したのは、顔の綺麗な王子様との身分差の恋。

貴族との結婚を推奨するご両親に隠れて、夜、変装して貧民である私のもとにやって来る王子。で、最終的にはご両親と剣を交えてまで説得を重ね、私との結婚を選んでくれるそんな素敵な王子様との恋物語が好き。

転生するなら、乙女的な世界観に派遣してよね。

このロールプレイング感丸出しの世界、女の子にはそぐわないよ。

「とりあえず歩かないとお……うう、でも、言葉とか通じるのかな」

肩に乗っかるおさげを揺らし、私は見知らぬ大地を歩き出す。

クロマキー合成だっけ。グリーンのバックを背景に、合成を差し込むやつ。

今の私、ブレザーとスカートというファンタジーには相応しくない格好で、そんな合成された世界にいる感じがする。

「ニンゲン！ ニンゲンだ！」

「ひえ？」

草原の向こうから、なにか黒点がわらわらと蠢いている。

「あれはー……」

「キキイイイイ！ ウラミイイツ！」

「きゃーっ！」

私の腰ぐらいの体軀をした、小人風の生き物が集団で向かってくる！

お兄ちゃんのゲームで見たことがある。あれってたしかゴブリンだ。実在するなんて思わなかったけど。

「狙われてる!? 狙われてるのかな! とりあえず話し合いを!」

ひとまず平和的解決を選択するのみ。私の選択肢には暴力なんてない。

「シネエエエエエ!」

「話通じそうにないよ〜ッ!」

選択肢なんか即撤回! 逃げることしか許されてない!

荷物を持って、慌てて広大なフィールドを走り抜ける。

私よりも身長が低いゴブリン。頭身の問題もあってか、足の速さは私の方がマシ!

フィールドの奥に森が見える。

平坦な土地かと思えば傾斜になっている。

これはチャンスだ!

かけっこの時は毎回転がってしまい、ついたあだ名はダルマのアリオ。芦那梨桜を

略してアリオだね。デパートみたいな名前だけど。

とにかく、ダルマの名にかけて転がるのみ!

「きゃあああああああアッ!」

ゴブリンの目にモザイクをかけてほしい。

スカートのまま転がる私の姿、たぶんえげつないほど滑稽だもん。

なんとか森の中に入ることに成功した。

代償としては、転がった影響でスカートが破れたこと。手で押さえてないとずり落

ちちやう。

「どこかに隠れないかな…:えっと、えっとお」

木々ばかりが生い茂る中、私は目を凝らして隠れ場所を探す。ゴブリンの声がいまだ遠くから聞こえる。捕まったらどうなるのかは、彼らのシネって単語から明確だ。

というか、日本語通じるんだよね。そこにびっくりした。

「あっ、あった!」

ほの暗い洞窟が、木々に隠れて存在した。

虫が多そうでイヤだけれどわがままは言えない。こんなスカートじゃ走れない。迷わず洞窟の中に逃げ込んだ。

「キキイイイイッ!」

洞窟に隠れると、ゴブリンの奇声が近くなる。

もしかしたら、鼻が敏感で、嗅覚で私の場所を探している? そうなるとここにも長く居られない。

(考えろ梨桜おお……妄想の中の王子様との時間は無駄じゃなかったはずだよ！ 私には絶対的なファンタジー観があるはず！)

ふと、思い出した。

私はバイトの休憩室にいて、着替える前だったからその手には、仕事で使うためのある服装が入っていた。

(一か八か……やるしかないよ！)

あの服に着替えれば、破れたスカートよりは早く走れるはず。

意を決して、着替えることにした！

ゴブリン達が洞窟の近くに現れた。リーダーらしきゴブリンは、ほかの人と違って小学五、六年生くらいのサイズはある。

「見つかったのか？」

日本語お上手！

声が少しくぐもっているけど、リーダーの声は聞き取れる。

自分のゴブリンは首を横に振る。しかし、一体のゴブリンが「キイキイ！」と喚きつつ、私のいる穴蔵を指さした。

「オレっちが見る。オメエらは隠れてな」

腰に布を巻き、ボロボロのガウンみたいなものを羽織ったリーダーゴブリンが、私の方へと近付いてくる。

「先手必勝だ。私の方から、仕掛けるしかない。」

「ど、どうも〜」

顔をにゅつと外に出し、挨拶を交わす。

「なっ！」

ゴブリン全員、私の姿を見て喫驚中。

当然だよ。なんせ今の私——ドラゴンの着ぐるみを着てるんだから。

低身長の人にぴったりな着ぐるみだ。竜の顔の形をしっかりと模していて、黒と赤を基調にした紛い魔物感。

私のバイト、ショッピングモールとかで休日やる、着ぐるみショーなのだ。

あのリーダーゴブリンより少し上程度にしかない身長だから、私にはこの着ぐるみしかサイズが合わず、いつもヒーローを脅かす悪の魔物役ばかり。

「こ、これは……」

驚くよね、うん。私もバカだと思っています。

この着ぐるみ、最大の欠点は——顔の部分に穴が出てて、すっぼりと顔面だけ外に出てる状態になってしまふのだ。

どこの着ぐるみショーに中の人の顔が見えるキャラがいるの！

おかげで私はいつも「あっ、アリオちゃんだー」って、正体がバレバレでバイトしづらいよ！

「あの一……私、なにもしないので……逃がしてもらいませんか？」

「かっ……」

「か？」

「神が現れたぞおおおおおッ！」

ゴブリン全員、今度は一斉に土下座。

「えっ？ ええ？」

よく分からないけど……なんとかなっちゃった。

ただでさえ異世界転生で、頭が追いつかないところに、ゴブリンは余計なことを運んだ気がする。

私を神と崇めるゴブリンに誘導され、森の奥にある彼らの村へやって来た。

木塀で壁を作った狭いサークルに、木で出来た小屋がある。着火すれば住まいどころか、エリア全体が燃えたぎりそうな環境だ。

で、私はどこに連れていかれたのかというと。

「わざわざ天界より下りてきたところ申し訳ありません」

ゴブリン達が床に手をつけて頭を下げる。

ここはゴブリンのリーダーが座する部屋らしい。彼らには大事な部屋なのに、ドラゴンの着ぐるみをした私が、なぜかおもてなしを受ける。

「あ、あの一……これはいったい……」

「神に向かって失礼ですが、お名前を伺っても？」

「か、神？ えっ、えっと……」

日本の名前を口にする、「神じゃねーな貴様！」みたいになって命が危険かも。ここはあだ名を名乗っておく。

「アリオ、です」

「絶対神の名はアリオと言うのですね……オレっち、しかと脳に焼き付ける所存！」

彼らは私のどこを見て神だと？

流されている、事の重要性を掴めず、私がボロを出しかねない。聞ける内に、さ

りげなく聞き出さなければ。

「い、いかにも私が神な訳なだけどー……あの、どうして私が神だって思うのか教えてもらっても？」

「神は双頭の竜であるという伝承があります」

双頭じゃなくて一頭一顔面だけだね。

「あの洞窟、儀式を用いるために活用するものなのですが、昨日、オレっちらは救いを求めて召喚の儀をやったばかりなのです」

「それで、私が召喚された、と」

「導き手により、召喚の儀を行えばいずれ天より神の使いが現れる。昔から続く伝承だから間違いありません」

異世界転生には関係あるのだろうか。判断材料にはまだ遠い気がするけど、その儀式が私を呼んだのなら、現実に戻るのも、儀式が必要になるかも。

「救いつてなに？ 困ってるってこと？」

「それはー……」

「ぎやあああああッ！」

「!？」

外から断末魔に似た、男声が響く。

「あ、あれは……ッ！」

「リーダー！ ヤツらが！」

「ちようどいい。アリオ様、こちらへ」

ゴ布林らに連れられて、私は外に出ることに。

「あのリーダーさん。お名前は？」

「オレっちはパヌウ。ゴ布林族を束ねています。まあ、隠れてやってるだけです」

「隠れて？」

草むらに身を潜め、パヌウと名乗ったゴブリンの指さす場所を見る。

「あれは……」

「オラッ！ ニンゲン様から逃げられると思ったか？」

「ギャハハ！ ゴブリンの仕事は汚物処理か雑用だろ？」

「ひいひい！」

金ぴかの鎧を纏った、騎士らしき男性二人が、ケタケタ笑いながら小さなゴ布林を追い込む。騎士の手には立派な剣。実物は初めて見た。鈍色の上にうっすらと黒ずんだものが付着している気がする。あれは……血、かな。

「王国直属の騎士です。オレっち達モンスターはアイツらの奴隷。だからオレっちの命も本当はアイツらのもの……」

「も、モンスターが……人間の奴隷？」

「かつては英雄がいたみたいなんです。けど、その文化が途絶えた時、世界で一番の権力を持った人間が、人間の脅威はモンスターだと言って魔物狩りを始めた。そうして我々は人間から逃げ、怯える毎日を過ごしてるんです。とは言っても、オレっちも本来は炭鉱で働く日雇い魔物……こうして反逆の術を探すのがやっとで」

だから神頼みで、召喚の儀式をやっていたんだ。

当然、私は神様じゃない。それどころか本物のドラゴンじゃないし、燃やせばあっという間に火の手が回る着ぐるみ。

勇者と魔王の伝承がないだけで、一方がこんなに苦しむなんて。

なんだか、魔物が可哀想だ。

「ククク、逃げ出した罪は重いぞ」

「キキイイイイッ！ タスケテエエエエエ！」

騎士に引きずられるゴブリンは、地面になにかを書いていた。

私達の方を見て、地面を指さす。伝言かな？ 騎士達が見えなくなると、私とパヌウは草むらから飛び出し、地面を覗き込んだ。

「これは……」

日本語で書かれていない。読めません。

「イリニヤ様が危険……か」

「そう書いてあるの？ イリニヤって？」

「ダークエルフ族のボス。以前まで我々を率いていた種族を超えたリーダーです。我々が離ればなれになった時、王国の王子に連れ去られたと聞きました……」

「おっ、王子……！」

「どうしたの？」

露骨に反応しちゃった。憧れの王子様に会える？

そっか、ここが乙女的な空想世界じゃなくても、王国があるなら王子様はいるって  
いうこと。

「ううん、なんでもない。えっと……ドラゴンの血が騒いだけ」

「おおっ、頼もしい！ その屈強な牙で王子を食いちぎっていただけると！」

「えっ？ くいっ……いや、それは……」

作り物だから絶対的に不可能なだけだなあ。上の顔はなんにも噛めないし、私本体

も煎餅噛むだけで顎疲れるほど貧弱だ。

そんな私の事情なんか、パヌウが知るよしもなし。

勝手に「これは頼もしい！」とゴブリン達と盛り上がり始めた。

「え？ ええ？ でも、王国なんか敵に回したら危なくない、かな？」

「なにをおっしゃいますか！ このパヌウ、神様とでしたら仲間達の介抱どころか、魔物達の夜明けすら見えてきましたよ！」

ゴブリン達は両手を空に掲げ、雄叫びを上げる。

事情は分かるよ？ 自分らの人生や運命が関わっているからね、必死になるのもよく分かる。でも、私になにができるのかな。

芦那梨桜——ドジでアホで、おっぱいに知能が吸い取られてるって揶揄されるようなポンコツ女。

唯一の長所は口元のセクシー黒子。

頭の回転は悪いし、今回だって自己主張できないまま流れた。

そんな私が魔物達の世界を平和に？

できるはずがない！

できるはずがないって主張したいのだけど、もうすでにパヌウに手を引かれ、王国へと連れていかれる道中なのだった。

ああ、どうやって生き延びればいいのか？

ゴブリンのパヌウと二人、城下町に忍び込んだ。

たしかにこの街は異質かもしれない。楽しみに人々が暮らす光景に、首輪で繋がれた魔物がペットの扱いを受けている。

人間が笑顔で、魔物に幸せがない。

こんな光景に、平和なんて似合わない。

私達は物陰からこっそり顔を出して、異物感たっぷりの町並みを見ている。

「これが現実です。魔物は人間の所有物でしかないんです」

「酷い……」

人を笑顔にするバイトをしているけど、こんな形は望まない。だって、現実世界で言うなら、笑顔で動物虐待するってことでしょ？

「で、あのー……イリニヤ様はいずこ」

「王城ですよ」

パヌウが指さすその先には、創作でしか見たことのない立派な城がある。

大きなゲートが城下町との間にあり、そのゲートがお城と橋渡しになっている。橋がある辺りは円形の窪みになっていて、中には水が張ってあるのかな。発想は日本のお城と同じで、襲撃対策なのかも。

「ゲートに門番が二人、かあ……どうやってたら入れるのかな？」

「そこはもう、アリオ様の炎でどかッ！」

着ぐるみだから、火は吹けないんだけど……。

チャッカマンがあれば火を噴くふりができそうだけど、女子高生の私がそんなの持ち歩いてるわけもなく。

ここは一か八か、アレを使うしかない。

「パヌウさん、場内に入れるのはどういう人？」

「商人ですね。魔物の中にもそういう者がいますから、荷物さえあればなんとか」

「荷物……パヌウさん、ちょっといい？」

ひとまず荷車を借りる。そこに荷物を詰めれば問題ない。荷物ならある。パヌウがドラゴンだと盲信するこの着ぐるみを活用する。

パヌウには荷車に乗ってもらい、私の着ぐるみを上に被せる。

スカートがずり落ちそうな格好だけど今は我慢だ。ここで逃げたらパヌウに疑われるし、城下町のある様子を見たら、放っておけない。

「待て。貴様何者だ？」

ゲート前に到着すると、門番さんに足止めをくらう。

落ち着け、私。

水着の下にパンツを穿いちゃっても動じなかった私だよ？ そのままプールに入っ  
てノーパンになったあの時の緊張感に比べれば、幾分マシな状況だと解釈すべし。

大丈夫、アリオはやれるよ。

「あ、あの、私、商人なんですけど、ドラゴンの皮を入手しまして！ それで、王子様に献上したくう！」

「うむ、入れ」

いいんだ！

今、着ぐるみ見た後に言ったよね？

この世界の人達、ドラゴン見たことないのかな。あっさりとゲートを開けて、城内へと通してくれた。

さて、あとはどこにイリニヤって方がいるかだけど。

私は荷物の整理をするふりをして、荷車の中のパヌウに声をかける。

「ここからどうしましょう？」

「まずは人目のない庭園へお願いします」

言われるがまま、庭園を目指す。

場所が分からないから城内の騎士さんに訪ねながら。ゲーム内にあるマップの便利さに気付く。現実で、ファンタジー世界に入ると、城の造りが複雑すぎて迷子になる。

小一時間かけて庭園に辿り着く。

草木が綺麗に生い茂る庭園には、大きな噴水が設けられている。白いテーブルがあって、豪華なティーパーティーが開催できそうな雰囲気。ちょうど人もいないし、ここでパヌウを解放しよう。

「ありがとうございます。神にこのようなご足労を」

「いえいえ、困ってる人は助けなくちゃ」

「ところで……その身体は……」

そりゃあそうなるよね。今の私は完全に人間だもの。

「神は人間に擬態することも可能なですね！」

「……は、はい」

嘘ばかりで胸が痛いよ。

ひとまず、着ぐるみを再着用。全員が全員、パヌウみたいに騙されるとは思わないこと。

「さて、問題はここからどうやってイリニヤさんを探すかだけどー」

「神の能力は使えませんか？」

「……えっと、たとえば？」

「その翼で空を飛んで窓から覗く、とか」

ごめんなさい、これは飾りです。

「火球をぶちまけて城内で騒ぎを起こして搜索するとか」

ごめんなさい、本物の頭はお腹にあります。

「伝説のドラゴンは翼の力で凄まじい竜巻を起こし、人間どもに厄災をもたらしたとも聞きます」

着ぐるみアリオではどうにもできない。

ボロを出せば、私はパヌウからも、城内の人からも狙われちゃう。異世界から来たってバレたらそれこそ色々尋問されちゃいそうだし。

「あら、貴方は……」

誰もいないはずの庭園に、第三者の声が響く。

私とパヌウはギョツとした心持ちで驚く。動転中の私は、とにかく声の方へと振り返り、とっさに身構えた。

「そんなに警戒しないで。ふふ、パヌウは久しぶりね」

「イリニヤ様！」

「え？ こ、この人が？」

長身の美女が噂のイリニヤ？

ダークエルフ族の彼女は、スタイル抜群で際どいビキニを改造した、現実世界でいうところの女子レスラー的な格好をしている。

そして、首には城下町で散々見てきた、奴隷の証がある。

「よくぞご無事で！ アリオ様、こちらが我々の導き手で、魔物の代表を務められているイリニヤ様にございます」

ということは、魔王的な立場の人ってこと？

「初めまして。私はイリニヤよ。貴方は……まあ、そういうことね」

これってバレている？

なんだか、なにもかも見透かしそうな雰囲気でちよっぴり怖い。でも、年上の綺麗なお姉さんって憧れる。私もあんな美脚が欲しい。せめて、もっと大きめの着ぐるみが似合う身体になりたいよね。

「あ、あのー……神です。アリオって言います」

「ふふ、神様よろしくね」

これは間違いなくバレていますね。

異世界の人を全員騙せるってわけじゃそうだ。

「ところでイリニヤ様、噂はかねがね……」

「ええ、ごめんなさい。捕まってしまったの。王子であるアーウインの手によって」

「酷いことはされていませんか？ あの王子は王国の歴史上でもっとも残虐で計算高い男と聞きます」

「今日、彼の女になるわ。どうなるかはまだ分からないけど、歴代の奴隷達が王子によって使い捨てられているのは有名な話。もう私は助からないでしょうね」

「逃げましょう！ こちらのアリオ様はドラゴンにあられます！ この逞しい翼で我々をお連れしてくれましょう！」

「ええっ？ いやあ、それはー……」

幼稚園児を背中に乗せただけでへばる女ですよ？

「私だけ逃げてどうするの？ ほかにも捕らえられた仲間はたくさんいる。私が逃げ

たら、その子達の処刑が始まるだけよ」

「ならばどうすれば……」

みんな、大変そうだなあ。

本来のファンタジー世界って、人間が魔物を倒すのに、この国は主従関係が逆転している。魔物は人間を襲う。本当は私も、人間側についた方がいいに決まっている。

でも、綺麗ごとなのかな。

この人達を救いたい自分がいるよ。

「お、王子に頭、下げてみる」

「アリオ様!?!」

「相手は人間だもん。話し合えばきつと、どうにかなると思う」

「残虐王子ですよ？ 口頭でなにかが通じる相手じゃありません！」

それでも、ファンタジーじゃない私には、それしかできない。

遅刻した時、着ぐるみの中が暑くて全裸になった時、初恋の人と間違えて顔の似た他人さんに告白してしまった時。

あらゆる状況で私は頭を下げた。

安売り土下座のアリオ……その異名を活かす時かも。

「じゃあ、呼んでもいい？」

「え？」

パヌウと一緒に素っ頓狂な声を上げた。

イリニヤ、あなたはなにを言っているのでしょうか。

すると、ダークエルフの彼女は指笛を吹く。その音に反応した首輪が、カタカタと音を立てて震える。

「イリニヤ様……いったいなにを」

「アリオちゃんに賭けるわよ」

カシャカシャと鎧つぼい音が聞こえる。

まさかとは思うけど……呼んだ？

「何者だッ！」

ゾロゾロと庭園に現れた金びか鎧の騎士達。次々にやって来ては、私達三人を囲うフォーメーション。

「ひえ、ひえり！ どうして呼んだんですかぁ！」

「ふふ、呼んだのはそっちじゃなくて」

「おやおや、愛する側室がなんの用かな？」

キザったらしい声がした。

ゆっくりと姿を見せたのは、他の男性とは一線を画した美貌を持つ男性。眉毛の形や表情が鼻につくけど、かなりのハンサムガイさん。

「あれが……」

「ええ、王子アーウィンです。あの男、自分の出世のために王族を次々に追放し、果ては両親さえも捨てた暴君……稀代の魔王とはあの者のこと！」

「やだなあ……僕は魔物どもの正しい使い方をやってみせたただけだ。別に庶民に奴隷を配給したわけでもないよ」

金髪のヘアスタイルも、目の鋭さも格好良くて、どことなくジャニーズっぽい。

でも、なんか鼻につく。

「魔物が二体も侵入するとは……イリニヤ、貴様が呼んだのかい？」

え……魔物が二体？

「いいえ、彼女は私を助けに来たのよ」

「そうか。ゴブリンとドラゴン……二体だけで我が城に侵入するとは。その度胸だけはこのアーウィンが褒めてつかわそう」

「パヌウ……一つ確信しました」

「な、なんででしょう？」

「あのアーウィンって王子、間違いなくバカだよ」

「は、はあ？」

同意は得られなくて当然。

パヌウだって着ぐるみと信じているんだもんね。

「伝説のドラゴンを呼び起こしてまで僕に刃向かう者がいるとは。中々に健気なゴブリンだな」

「オレっちはこの日をどれだけ夢見てきたことか……それをオメエに果たすまで！」

この状況の打開策が思いつかない。

イリニヤはどうしてこんな最悪の事態を引き越したんだろう。

「どうした？ ドラゴンならばその翼で我々を攻撃できるはずだが？」

できませんよ……私の計画はそもそも土下座でなんとかしようって感じだったし。

「アリオ様、どうかお力添えを……ッ！」

「ううう……そう言われてもお……」

ジリジリと騎士が私達への囲いを狭くする。

憎たらしい王子はそんな私達を見て、嘲笑している。

この男、イリニヤを側室と言っていた。今日、ここで逃したら、イリニヤはあんな鼻につく王子の女つてことになる。

同性として、それだけは避けてあげたい。

「ククク、ドラゴン希少価値がある。生け捕りにしろ」

「アリオ様を見くびるな！ 我々ゴブリンが一生懸命召喚したのだ！ すべてはこの時のために！」

「パヌウさん……」

「人間に逆らうのを止めればそれなりに幸せな人生を送れたものを」

アーウィンは右手を横に出すと、配下がその手に大きな剣を握らせる。直径一三〇センチはあるロングソードだ。

「仕方ない。ゴブリンはこのアーウィン自ら葬ってくれる」

ロングソードを手にし、王子が襲いかかってくる！

「ひゃあああ！」

刀身が長いせいで、一振りの範囲が非常に広い。パヌウを狙った一閃が、私をも狙おうとしてきた。

「アリオ様！」

「私は平気いい！」

「くっ！ 見境なく攻撃とは……呆れた王子だ！」

「ふふ、バケモノ二匹に遠慮はいらないだろう？」

なにか対策を考えないと。けれど、魔法も使えなければ運動神経もない。そんな不出来な自称魔物の救世主がなにをできるの？

(思い出せ梨桜！ なにか、なにかあるのか……！)

そういえば、着ぐるみの内部に“ある暴漢対策”が施されている。

私、アリオはただのズングリムックリなドラゴンにあらず。

「くらえ〜！ 十二色の雨あられ〜！」

コントロール能力一切皆無！

着ぐるみの中に入って、顔部分から直に手を出してペイントボールを投げる。

「なんだこれは！」

上空から降り注ぐボールは地面に落下すると、潰れて洗濯しても取れない色を付着させる。私はパヌウとイリニヤの手を引いて、ペイントボールの被害に遭わないよう、噴水の中へ飛び込む。

「アリオ様、あれは!？」

「えっとお……ふっふっふっ、神の一撃だよ」

「さすがだわ、アリオちゃん」

「くそお！ なんなのだ、これは……目が、ぐぬぬ……ッ！」

下手くそ投げだったけど、騎士全員に見事命中したらしい。

本命である、アーウィンに対しても。

「あっ、アリオちゃん……それ……」

「え？」

イリニヤが私の身体を見て、困惑を極めている。

それにつられてパヌウも、膝を崩した。

「アリオ様が……我々を救ったばかりに、お力を使いすぎて……」

「え？ ええ？ なになに？ 私、全然ピンピンしてますけど」

全員が目を点にしている状況。視線の先はやはり私の身体。

なんだろう。そう思って身体を見てみると――。

「にゃっ、にゃにいっくっくっくッ！」

落ちた。色が。全身が今、真っ白になった。

まるで塗装前のフィギュア。

今の着ぐるみは真っ白だ。そうか、この着ぐるみ……屋内でしか使っていないから、雨天公演してなくて、塗装に気を遣ったことなんてなかった。まさかこんなにザルな塗りをされていたとは。

「ああああ……アリオ様の力が費えてしまい、灰になる寸前だ……オレっちは、どうすれば……」

「死んでないよ！」

「ククク、急に色彩の雨を降らせたかと思えば、瀕死じゃないか。召喚されたばかりのドラゴンなど、所詮この程度」

「生きてるってば！」

「アリオちゃん……可哀想に」

色のないドラゴンの顔を見て、みんな私を亡き者みたいな目で……。

「ドラゴンは放っておけ。時期にくたばる。その前にゴブリンを始末しろ」

「はっ！」

たくさんの騎士が一斉にパヌウめがけて襲いかかる。

なんとかしなくちゃ。もうペイントボールはない。

「アリオ様、逃げてください！ ここはもう！」

「で、でも！」

「神であるアリオ様がなくなったらおしまいです！」

「クハハハ！ 死にかけのドラゴンを庇うとは愚か者め！ では、遠慮なく貴様から処してやろうか！」

パヌウが駆け出し、私とイリニヤから騎士達の目を遠ざけようと、全力で賭けだしていく。

騎士の剣がパヌウを狙う。

あのままでは完全に、パヌウの首がはねられてしまう。

なんとかしなくちゃ！

私が持てるもので、パヌウを助けなくちゃ！

「パヌウに手を出すな〜〜〜！」

口を大きく開けてシャウトした。

直後、目を見張る光景に驚いた。

なんと、私の口の前にぐるぐると渦巻く炎の玉が現れたのだ！

「こ、これは……！」

「あれはドラゴン族が扱う火の力!? あのドラゴンまだそんな力が！」

よく分からない。状況の判断に苦しむけど、私は今、火の魔法を生み出しているってことかな。

「全員、標的変更！ ドラゴンの首をはねよ！」

「アリオちゃん！ 今よ！」

「がっ、がお〜〜〜おっ！」

ヒーローショーの時のように、力一杯吠える。

口の前で渦巻いた炎は勢いよく騎士達にぶち当たり、あんなに仰々しい鎧を着ているのに、みんな吹き飛んだ。

「やった！」

「な、な……なんて、力だ……！」

この好機を逃してはならない。

倒れた大勢の騎士の間を、のっそりそのそと歩き、私はズンッとアーウィンの前に立ちはだかる。あんなにも余裕綽々で、偉ぶっていた王子は、小娘でしかない私の迫力に折れて尻餅をつく。

「ひっ！」

「仲間達を解放しなさい」

太陽を背に感じる。

今、アーウインの目にはどういいう私が映るだろう。

後背に太陽の輝かしさをまとい、神々しいドラゴンに見えるかな。

「ひっ、貴様っ……私に逆らうとどうなるか……ッ！」

「燃やされたくないなら、従いなさい」

絶対神アリオ——を演じて、気迫を身につける。

情けない王子様は動揺に動揺を重ねて、怯え倒す。

魔物と人間の戦い……勝ったね。

スキップで草原に行くパヌウ。醜さばかり際立つゴブリン族だけど、意外と可愛いよね。

「神様のおかげで助かりました！ いや、オレっち感服いたしました！」

「助けられたのはこっちだよお」

「なにを言いますか！ あんな火炎攻撃初めて見ましたよ！」

先頭を進むパヌウに続き、私、イリニヤ、そして、その他大勢のモンスター軍団が、フィールドの足下が見えなくなるほどたくさん、同じ方角へと歩いている。

城内の奴隷はすべて解放された。

王子があんな情けなく失禁するんだもん。誰も無様な姿に怯えるって発想は持たなくなり、一斉に人間への反発を始めたのだ。

で、結局、城下町からは奴隷がいなくなった。

魔物の代わりにその場に放置されたのは、彼らを縛っていた恨めしき首輪の山だ。

これにて魔物を救った救世主として、アリオは歴史に名を刻むかも。

アーウインがあのまま引き下がるとは思えないから、引き続き警戒はしておいた方がいいけどね。

「それにしてもアリオちゃん、色はどうなったの？」

こそこそと耳打ちをしてきたイリニヤ。

やっぱり、私の正体に気付いているみたいだ。

「芸術家さんを探して、色を塗ってもらえればって思います」

私は「それと」と言って、言葉を繋ぐ。

「さっきは、助けてくれてありがとうございます」

「ふふ、なんの話？」

「とぼけなくても大丈夫ですよ。みんなの夢、壊さずに済みました」

この世界も、私のバイトと一緒だ。

パヌウを含む魔物にみんなは、私という存在に夢を見ていた。

現状を救ってくれる神に対する憧れだ。

着ぐるみは夢を届ける。

中身がなんて話はしちゃいけない。ヒーローはいる。子供に与えるのは現実じゃない。どんな逆境でも必ず助けしてくれるヒーローと、その正義を信じ続ける己のピュアさ。その手において、彼ら魔物も私がバイト先で相手にする子供達も、なんら遜色のない、夢見る存在なのかもね。

「次やる時は、空飛ぶ演出をお願いしますね」

「そこは練習して自分で飛んでみなくちゃ」

「そ、そんなあ！」

「ふふ、でも……助ける気はなかったの。確かめたかっただけ。貴方があの子達の必死さをどう思っているのか。で、貴方は動いた。正体がバレる、命の瀬戸際でも、我が身を省みず、みんなのためにね」

「イリニヤさん……」

「じつは貴方をこの世界に召喚したのも私だったのよね」

「ええ……っ！」

衝撃事実の告白！

イリニヤがパヌウ達の導き手って話、本当だったんだ。

「あとでこっそり帰してあげる。もう、十分すぎるぐらい身体張ってもらったものね」

「いえ……」

「ん？ どうしたの？」

私は自分でも分からない。なにを思ったのか、先頭のパヌウを追い抜き、魔物達の方へ身体を向けた。

「みんなよく聞いて……ッ！」

「あ、アリオ様？」

「私はこれからもみんなが平和の暮らせるように頑張ります！ 今度は人間と魔物が共存できるように！ だから、今後も神様続けてもいいですか……ッ？」

これが私の選んだ道のりだ。

もしかしたら学校、留年しちゃうかもしれないし、これってボランティアだから時給は発生しない。

でも……神様をやるのもなんだか悪くないよね？

「もちろんです！ オレっち一生ついていきます！」

「ふふっ、貴方もおバカだったのね」

魔物達は一斉に盛り上がり、私を歓迎してくれる。

そうだよね。着ぐるみの私を魔物と捉え、神と崇める彼らも大バカ者だ。

でも、一番の間抜けさんはきつと、着ぐるみを着て、魔物の神を演じ続ける私の方だよね。

バカな着ぐるみ女だけど、これからもよろしくね。